いきいきまえばし人

世界を舞台に活躍したい

レーシングカートで海外レースへ

星野　伶衣さん・13歳
東善町

昨季のレーシングカートの大会・ハルナカップで7戦中3回優勝し、シリーズチャンピオンに輝いた。これにより、1月にマレーシア・セパンで行われたロータックス招待レースに出場した。

「海外でのレースは初めてでした。スピードが出るコースだったし、参加した外国人のレベルも高かったので、大変勉強になりました」

レーシングカートを始めたのは、小3の時。テレビでF1鈴鹿大会を見たのがきっかけ。試しにレンタルカートに乗ってみると、すぐに夢中になり、本格的にハンドルを握るようになった。レースでは時速110キロ以上のスピードで疾走する。ヘルメットをかぶりコースに入ると、持ち前の集中力を発揮する。

現在、七中の1年。月曜から金曜までは普通の中学生活を送り、土日曜はカートの世界に。好きな科目は英語と国語。英語は世界を目指すために必要と考え、小学5年から習っている。ゲームも好きで、通信機能を使ってレーサー仲間とゲームの中でもレースを楽しんでいる。

「今はカートに夢中です。海外でのレースを経験して、世界を相手にしていきたいという気持ちが、ますます強くなりました。ことしはMAXフェスティバルというレースで2位以内に入り、日本代表としてワールドカップに出場したいですね」

将来は、F1ドライバーになりたいと目を輝かせる。とびきりの才能と集中力で世界に羽ばたいてもらいたい。

いにしえ万葉鏡　その二十三

問い合わせは　文化財保護課　☎231―9531

朔太郎の詩の題名に使われた国指定史跡　天川二子山古墳

文京町三丁目の県立文書館の東側、住宅街にひっそりと埋もれるようにある前方後円墳が天川二子山古墳。かつては天川原町の畑や水田の中にどっしりと横たわり、その存在感は大きなものでした。墳頂からは両毛線を走る蒸気機関車を眺めることができたそうです。

この天川二子山古墳は本市出身の詩人・萩原朔太郎の作品に登場しています。「二子山附近」という詩では大正10年ごろの情景を「われの悔恨は酢えたり／さびしく蒲公英（たんぽぽ）の茎を噛まんや／ひとり畝道をあるき／つかれて野中の丘に坐すれば／なにごとの眺望かゆいて消えざるなし。／たちまち遠景を汽車のはしりて／われの心境は動揺（どうじょう）せり。」と描いています。また、現在の本町三丁目で終戦期を過ごした作家・司修さんは「汽車喰われ」の中で、前橋空襲の時にこの古墳に避難して、猛火に包まれて焼け落ちる市街地を眺めたといいます。二子山古墳はこの地域のシンボルとして市民のさまざまな思いをつくっていたのです。

長さが100メートルを超すこの天川二子山古墳。造られたのは6世紀といわれ、同時期に造られた大室古墳群や総社二子山古墳などと共に重要な古墳の一つとして保存されてきました。

まだ正式な発掘調査は進められていない天川二子山古墳。いつの日か、その重要性に光が当たるそのときまで眠り続けています。今は、陽春の光を探しに出掛けてみてはいかがでしょうか。

古墳時代を今に伝える

クローズアップ

門出を祝う式典が盛大に

グリーンドーム前橋で1月10日、成人祝が開催されました。高木市長らのあいさつに続いて行われた「はたちのつどい」では、ジャンケン大会や音楽ライブなどを実施。晴れ着に身を包んだ新成人たちは、旧友との再会を喜び合い、話を弾ませていました。

郷土の歴史を肌で感じて

1月8日から17日まで、前橋プラザ元気21で東国千年の都文化財展を開催しました。本市と高崎市における近年の遺跡発掘調査の成果を展示。訪れた人たちは、土器や埴輪（はにわ）など遠い昔からの宝物を見て、古代に思いをはせていました。

伝統の妙技に大きな拍手

1月10日、前橋公園で消防隊出初式を実施。姿勢服装点検や分列行進などで、隊員の団結と士気の高揚を図りました。はしご乗りでは、次々と繰り出される妙技に、みんな大きな拍手を送っていました。